

2017年11月22日／浪宏友ビジネス縁起観塾

人生の重き荷物

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含経典1』（ちくま学芸文庫）／人間の分析（五蘊）に関する経典群／蘊相応／16重担、『阿含経典2』／詩（偈）のある経典群／悪魔相応／5 歡喜

(2) 主題

人間は、知らず知らずのうちに、自ら苦悩を背負って、人生を歩んでいるということに、目を向けてみたいと思います。

2. 重き荷物

(1) 経文「重担」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、もろもろの比丘たちに告げて、「比丘たちよ」と仰せられた。

彼ら比丘たちは、「大徳よ」と答えた。

世尊は、このように説きたもうた。

「比丘たちよ、わたしは、いま、汝らのために、重き荷物のこと、重き荷物を担える者のこと、また、重き荷物を担うこと、重き荷物をおろすことについて説くであろう。よく聞くがよい」

（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.415）

(2) 重き荷物

ここに、「重き荷物」を主題にして、次の課題が示されています。

「重き荷物のこと」、「重き荷物を担える者のこと」、「重き荷物を担うこと」、「重き荷物をおろすこと」

3. 重き荷物のこと

(1) 経文「重担」

「では、比丘たちよ、重き荷物とはなんであろうか。生を構成する五つの要素（五取蘊）がそれである。その五つとはなんであるか。いわく、色（肉体）なる要素、受（感覚）なる要素、想（表象）なる要素、行（意志）なる要素、識（意識）なる要素である。比丘たちよ、これらを名づけて五つの重き荷物というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.416）

4. 五蘊

(1) 人間存在の分析

「生を構成する五つの要素（五取蘊）」とあります。これは、釈迦牟尼世尊が人間存在を分析して得られた概念です。人間存在の分析はいろいろとなされていますが、その中の一つがこの「五蘊」です。

釈迦牟尼世尊は「苦の解決」を大きなテーマにされました。人間存在の分析も「苦の解決」の視点からなされたものと考えてよいのではないのでしょうか。

(2) ビジネス縁起観による五蘊の解釈

この6月の勉強会で、「自分はどのような人間か」と題して学んだときに、ビジネス縁起観による五蘊の実務的な解釈をお示ししました。これを再掲します。

① 五蘊の解釈

色：「色」は、肉体です。受・想・行・識は、この肉体において働く精神的要素です。

受：「受」は、外部からのインプット、内面からのインプットを受けて認識が生じることです。

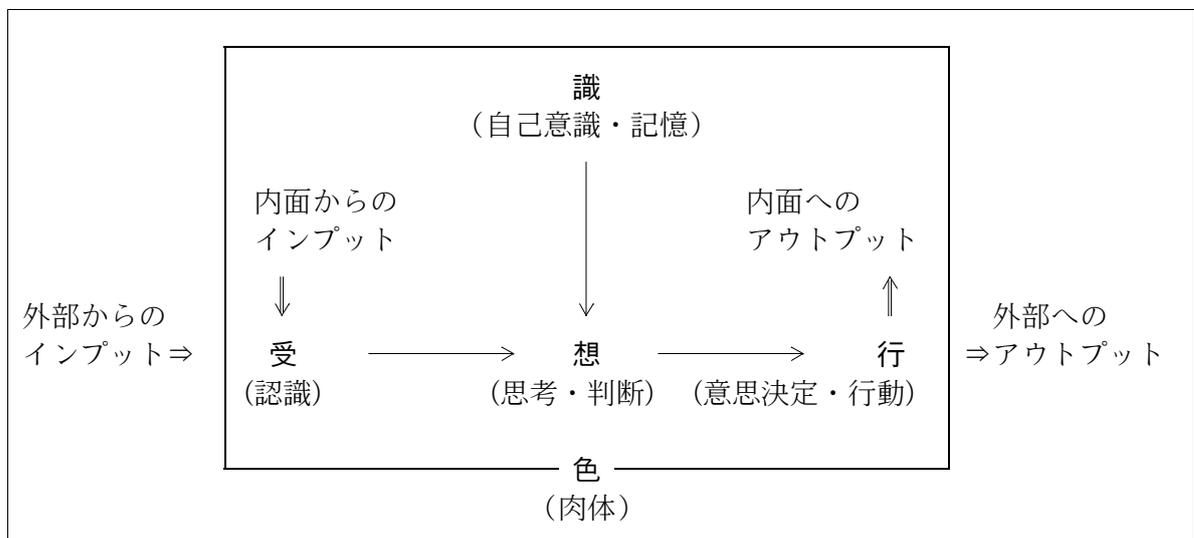
想：「想」は、「受による認識」と「識における自己意識及び記憶」によって、思考や判断が生じることです。

行：「行」は、思考・判断をもとに意思決定が生じることであり、ここから外部や内面に向かってアウトプットが生じます。

識：「識」は、「色・受・想・行・識」の働きから、自分はこのような人間であるという自己意識が生じることです。

また、これまでの認識・経験が「識」に蓄積（記憶）され、「色・受・想・行・識」の働きに影響を与えています。

② 概念図



5. 重き荷物

ここには、重き荷物とは「生を構成する五つの要素（五取蘊）」であるとあります。

「色・受・想・行・識」という五つの要素が、重き荷物であるということです。

ビジネス縁起観の解釈でいえば、「肉体」「認識」「思考・判断」「意思決定・行動」「自己意識・記憶」という五つの要素が、重き荷物なのです。

この後の経文からは「五つの要素が、重き荷物である」というよりも「五つの要素が、重き荷物になる」と言ったほうがよいように思われます。

6. 重き荷物を担える者のこと

(1) 経文「重担」

「比丘たちよ、では、重き荷物を担える者とはなんであろうか。人間がそれである。これこれの名、これこれの姓をもてる方々がそれである。比丘たちよ、これらを名づけて重き荷物を担える者というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 416）

(2) 重き荷物を担える者のこと

「生を構成する五つの要素」を重き荷物にしてしまっている人は誰でしょうか。釈迦牟尼世尊は「人間がそれである」と述べています。

「これこれの名、これこれの姓をもてる方々がそれである」とあります。これは、一人一人に向かって、「〇〇（姓）□□（名）さん、あなたは『生を構成する五つの要素』という重き荷物を担っていますね」と、言っているように聞こえます。

私たち一人一人が、「生を構成する五つの要素」という大事なものを、重き荷物にしてしまっているということです。

7. 重き荷物を担うこと

(1) 経文「重担」

「比丘たちよ、では、重き荷物を担うとは、どういうことであろうか。

心に喜び、身を燃やして、あれやこれやに、わっとばかりに殺到する渴愛がそれであって、それが、さらに迷いの生（後有）をもたらすのである。

すなわち、性欲のたかまり（欲愛）、生存欲のたかまり（有愛）、自己優越の欲望のたかまり（無有愛）である。

比丘たちよ、これらを名づけて、重き荷物を担うとはいうのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 416）

(2) 重き荷物を担うこと

「重き荷物を担う」とはどのようなことでしょうか。

- ① 人は「生を構成する五つの要素」によってもたらされる快さに執着します。「肉体」「認識」「思考・判断」「意思決定・行動」「自己認識・記憶」という五つの要素が快さを味わいますと、これに執着するのです。
- ② 執着が満たされると、心に喜びが生じ、ますます執着が深まり、身を燃やすほどになります。その対象は一つや二つではありません。「あれやこれや」とありますから、出会うもの出会うものが片っ端から、その対象になるのです。

執着は渴愛にまで深まり、あれやこれやに、わっとばかりに殺到します。この「渴愛を持つこと」が、「重き荷物を担うこと」なのです。

(3) 迷いの生（後有）をもたらし

- ① 渴愛を持つと、「さらに迷いの生（後有）をもたらし」のです。

「後有」とは「未来世における生存」です。この後の人生が、迷いの人生になるのです。

「迷いの生（後有）」の内容は、「性欲のたかまり（欲愛）、生存欲のたかまり（有愛）、自己優越の欲望のたかまり（無有愛）である」とあります。

- ② 「性欲」・「生存欲」は、生きるものにとって必要な欲望ですが、執着・渴愛に汚染されますと、理に外れた求めかたをするようになります。
- ③ 「自己優越の欲望」とは、人間関係における欲望（良く思われたい、やさしくしてもらいたい、自分の都合にあわせてもらいたいetc）、社会的な欲望（財欲、権勢欲、名誉欲etc）が考えられます。これらの欲望も、正しく発揮すれば活動のエネルギーとなりますが、執着・渴愛によって汚染されますと、これまた理に外れた求め方をしたり行ない方をするようになります。
- ④ 身を燃やすような執着・渴愛で、理に外れた「性欲」・「生存欲」・「自己優越の欲望」を起こしている人生は、まさしく「迷いの生」にほかなりません。

「迷いの生」は、「思うに任せぬ人生」であり、「重き荷物を担う」人生になるのです。

6. 重き荷物をおろすこと

(1) 経文「重担」

「比丘たちよ、では、重き荷物をおろすとは、どのようなことであろうか。

それは、その渴愛を、まったく、余すところなく離れ滅することであり、放棄することであり、断念することであり、永断することであり、解脱して、執著なきにいたるのである。

比丘たちよ、これらを名づけて、重き荷物をおろすというのである」（増谷文雄編訳『阿含経典1』

(2) 重き荷物をおろすこと

「重き荷物をおろす」とは、渴愛（執着）を滅することです。

ここには、

- ・余すところなく離れ滅する
- ・放棄する
- ・断念する
- ・永断する

とあります。渴愛（執着）を、徹底的に滅するのです。

これが、重き荷物をおろすことなのです。

(3) 重き荷物をおろす方法

この経文には、重き荷物をおろす方法については何も言っていませんが、八正道を中心とする修行の道であることは明らかです。

身に染みついた執着・渴愛の衝動に耐えて、八正道を実践するのは並大抵ではありません。だからといって、実践しないでいれば、重き荷物を担い続けることになります。強い意思をもって、自らの執着・渴愛と闘い、打ち勝たねばならないのです。

7. まとめの偈

(1) 経文「重担」

世尊は、そのように説きたもうた。そのように説いて、この素晴らしき師は、さらに説きたもうた。

「五蘊は重き荷物にして
これを担うものは人である
重きを担うは苦しくして
これを捨つれば安楽なり
すでに重荷を捨てたらば
さらに重荷を取るなかれ
かの渴愛を滅すれば

欲なく自由となりぬべし」（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p. 416~417）

(2) 重きを担うは苦しくして

「重きを担うは苦しくして」とあります。「渴愛で生きる」ために「重きを担う人生」になってしまいます。多く人は、このことに気づきません。むしろ、渴愛を満たすことを目的として人生を歩みます。このため、幸福を求めながらかえって苦しみを増大するという矛盾が生じてしまいます。

(3) これを捨つれば安楽なり

「これを捨つれば安楽なり」とあります。渴愛という重き荷物を捨てれば、安楽になるのです。庭野日敬師の次の解説に、釈迦牟尼世尊の真意が述べられていると思います。

「自分の身のまわりにあるもの、すなわち財産とか、地位とか、名誉とか、家族とか、そういったものに対して愛情を感じるのは当然のことですが、それに執着すると、心にしこりができていろいろな悩みが生じます。もし、捨てるべきときにはいつでも捨てることができるという心境に達すれば、心が自由自在になって、とらわれることがないために、かえって家族と仲よく暮らすこともでき、財産も有意義に使うことができ、地位もりっぱに生かすことができるようになります」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p. 59）

(4) 重荷を再び担わない

「すでに重荷を捨てたらば さらに重荷を取るなかれ」とあります。執着・渴愛を捨てたなら、再び執着するな、渴愛を持つなということです。

「かの渴愛を滅すれば 欲なく自由となりぬべし」とあります。「自由」とは、解脱して何ものにもとらわれないことです。

8. 悪魔との対話

(1) 経文「歡喜」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、あしきもの魔羅は、世尊のもとに到った。到ると、偈をもって世尊に語りかけた。

「子ある者は子によりて喜び

牛飼う者は牛によりて喜ぶ

人の喜びはその依るところによる

依るところなき者は喜ぶことなからん」

〔世尊は仰せられた〕

「子ある者は子によりて悲しみ

牛飼う者は牛によりて悲しむ

人の悲しみはその依るところによる

依るところなき者は悲しむことなからん」

その時、あしきもの魔羅は、「世尊はわたしを知っている。世尊はわたしを見抜いているのだ」と、苦しみ萎れて、そこにその姿を没した。

(2) スッタニパータにおける経文

① 経緯

『阿含経典』における「歓喜」の経文は、さらに古い経典とされる『スッタニパータ』における「蛇の章」の「ダニヤ」における経文でもあります。

牛飼いだニヤは遊牧民だったようです。多くの牛を持ち、家庭も円満で幸せいっぱいでした。だニヤは釈迦牟尼世尊と語り合ううちに感銘を受け、釈迦牟尼世尊の弟子となりました。

その直後に、悪魔が釈迦牟尼世尊に語りかけたのです。

② 経文

「悪魔パーピマンがいった。

『子のある者は子について喜び、また牛のある者は牛について喜ぶ。人間の執着するものものは喜びである。執着するものものない人は、実に喜ぶことがない。』

師は答えた、

『子のある者は子について憂い、また牛のある者は牛について憂う。実に人間の憂いは執着するものものである。執着するものものない人は、憂うことがない。』」

(中村 元訳「ブッダのことば(スッタニパータ)」岩波文庫、p17)

(3) 悪魔の主張と釈迦牟尼世尊の教え

悪魔は、子や牛に執着するから喜びがあるのだと主張します。

釈迦牟尼世尊は、子や牛に執着するから憂いを生じると説きます。

執着によって味わう幸福は、いつ憂いに転じるか分からない危なっかしいものです。執着しなければ憂いを生じることがないと、釈迦牟尼世尊は説いています。

(4) 「悪魔」について

① 増谷文雄博士は、「阿含経典の文学形式」と題する章で、興味深いことを論じています。

「阿含部の経典における悪魔説法は、一つの心理描写の文学形式なのである。なにか、不安、疑念、もしくは躊躇がその心中に擡頭したときには、それを描写するに悪魔説法をもってする。それが初期の経典における文学形式の約束ごとであったと考えられるのである」(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p. 092)

② この論によって考えれば、この経文は次のように解釈できると思います。

釈迦牟尼世尊は、だニヤが、貞淑な妻、元気な子、多くの牛によって幸福を味わっているのを見たとき「これでよいのではないか」という思いが心をよぎったのでありましょう。しかし、続いて次の思いが起きたのです。「こういう幸福はいつ崩れるか分からない」と。

こうした心の動きが、ここに記されているのだと考えることができます。